

8/22 マタイの福音書 7 章 24-29 節「聞いて行う者」

小池 宏明 牧師

5 章から 7 章に渡る山上の説教をまとめて「創造本来の人間として、愛と真実、自由に生きるための道しるべである」と表現した人がいた。山上の説教の中で、主イエスは「敵を愛しなさい、迫害する者のために祈りなさい」と教えて下さった。しかし、私たちは、自分に牙を剥いて来る人を愛することができるだろうか、赦すことができるだろうか、ましてや執り成し祈ることができるだろうか?と考える行き詰まってしまう。ところが、本当に、実践することができたらならば、真に深い愛の持ち主として、様々な環境や人間関係から本当に自由な解き放たれた生き方ができるだろう。このことは、ただ聞くだけでは、決して味わうことができない生き方だ。山上の説教は、私たちを苦しめる教えではなくて、本来の自分自身を取り戻すための幸いな教えなのだ。では、御ことばを聞いて行う者とは、どういう人のことを言っているのか、主は、最後に印象深く私たちの心に刻んで下さった。*賢い人と愚かな人の例え 24 から 27 節を読むと、二人の人物が同じように家を建てた。家を建てるとは人生を立て上げることを例える。そして二人とも、同じように災害に遭った。これはさまざまに試練に遭うこと示す。それぞれの人生の中で、病気であったり、辛い別れであったり、親子や夫婦の関係において、学校や、職場において、とても苦しい経験をさせられることがある。人生の土台とは、何を信じて生きるのか?と言うことだ。岩の上に人生を立てた人は、どんな試練が襲って来ても決して倒れない。しかし、砂の上に人生を立てた人は、試練のときに、ひどい倒れ方をする。これまで築き上げて来た人生がすべて崩れ去って、何にも無くなるほどの虚しい結果を迎えるのだ。聖書では、主なる神様が岩に例えられている。(詩篇 18 篇 2、3 節) また、新約聖書では、イエス・キリストこそ信仰の土台であると証言している。(第一コリント 3 章 10、11 節) つまり、信仰と生活の土台を、イエス・キリストに置いているのなら、それぞれどんな人生を営んだとしても、決して倒れることがない。主イエスは、山上の説教の最後で、揺ぎ無い巖なる土台を、見出すように求めておられるのだ。*キリストを土台にして人生を歩もう 私たちは、主イエス・キリストが直接語られた言葉を聴いてきた。その御ことばは 私たちが本来の人間として生きるための道筋を示している。その御ことばを土台とするなら、いえ、御ことばの実体であられる主イエス・キリストを人生の土台に据えるなら、私たちは御ことばをよく聞く者、聞いて行う者へと創り変えられて行くのだ